

別紙1

論文の内容の要旨

論文題目「社会の探究としての民族誌—ポスト・ソヴィエト社会主義
期南シベリアに於ける集団範疇と民族的知識に関する記述と解析」

論文提出者氏名 渡邊 日日

本論文は、ロシア連邦ブリヤート共和国セレンガ郡でのフィールドワーク(1996～1998年、計1年)による、モンゴル系民族であるブリヤート人を対象とした民族誌である。この民族誌は、序章、後の民族誌的記述の為に歴史的背景が描かれる第1部、セレンガ・ブリヤート人の集団範疇・儀礼・言語と言説・儀礼・学校教育についての記述と解析の第2部、そして7つの補遺などから成り立っている。

序章では、民族誌としての本論文が依拠する理論的視座及び著者の民族誌観が述べられる。1989/91年の北ユーラシアと東欧に於ける社会主義体制の瓦解は、単なる政治体制の変更ではなかった。それは、政治・経済・宗教・教育など、社会の様々な領域(下位システム)が同時に、一挙に変化させられる出来事であった。而るに、議論の趨勢は、政治と経済とを可能な限り分離する新自由主義の世界的席卷も手伝って、総合的・統合的概念としての社会概念の株価を下落させている。そこで本論文は、学の専門分化と社会分化の過程を認めつつも、理論的脈絡及びポスト社会主義状況の解釈双方の観点から、様々な下位システムに於いて集団範疇が如何に多様に縁取られるのかに注目しつつ、全体論的な民族誌を試みている。または、どの様に語りに見られる知識が社会的に生成・循環しているのかという広義のメディア論的視座も重視する。

第1部「ソヴィエト史とソヴィエト『文化』」、第1章「ブリヤート人の歴史的な文脈」では、ブリヤート人の略史と調査地の概要が述べられる。民族とその準国家的領域（[自治]共和国）を基本的な支柱として形成されたソヴィエト連邦及び現在のロシア連邦の特徴が指摘され、調査地のトホイ（ザグスタイ村行政区）・ズルガン＝デベ（ノヨホン村行政区）・ヌル＝トゥフム（ウブル＝ゾコイ村行政区）の3村の現状が描かれる。どの村も民営化の影響で、インフラが機能不全となり、失業者が増加している。

第2章「氏族からコルホーズへ―作業仮説による記述」は、セレンガ・ブリヤート人の氏族構成の史的变化を、氏族の社会的統合機能がソ連時代になってコルホーズに取って代わられたという仮説を暫定的に採りながら、描いている。歴史的には、ザグスタイは相対的に西ブリヤート人が多く、ノヨホン、ウブル＝ゾコイでは殆ど東ブリヤート人が占め、前者では Tsongol、後者では Tsongol 乃至は Tabangut が、帰属する氏族範疇として言及される。学校の分布などからしても、ウブル＝ゾコイはノヨホンと比べ統合が弱いという特徴がある。

第3章「ソヴィエト『文化』の建設」では、シベリア少数民族に対するソ連文化政策の特徴について記されている。特に、大きな影響を与えたスターリンの「内容に於いてプロレタリア的、形式に於いて民族的」というテーゼ、「文化建設」という理念と実践、識字率向上キャンペーン、女性の「抑圧の解放」、世俗的なソヴィエト新儀礼の導入、そしてこうした諸実践を説明する言説の特徴などが記述、検討される。

第2部「集団範疇と民族的知識の民族誌」、第4章「集団範疇の諸審級―民族と共同性について」は、旧ソ連に於ける民族の在り方及びブリヤート人の東西の差について、語りと統計それぞれに於いて詳述される。旧ソ連では民族が即自的な集団範疇であり、ブリヤート人にとっても同様であること、西ブリヤート人に対する東ブリヤート人の見方、及びモンゴル人に対する見方が、ソヴィエト的「文化」の定義と実践にその根柢の多くを持つこと等が描かれる。ソ連崩壊に伴い「世界」に放り出されたブリヤート人は、少数派であることを意識せざるを得ないが、中には独特の認識でロシアとの民族的共同性を構築しようとする者もいる。他方、ブリヤート性を保持しているという語りに反して、ロシア名が多く名付けられており、語りと実在とのずれが指摘される。最後に、民族を分析するに当たって必要と考えられる6つの基準が提示される。

第5章「民族の断片化―言語変種・親族名称・『多』言語状況」は、ブリヤート標準語・ブリヤート語諸変種・ロシア語の三者関係に関するデータを用い、セレンガ・ブリヤート人の「言語」と集団範疇との関係を考察している。セレンガ郡の諸変種について概観されたのち、ヌル＝トゥフム住民の中に、ツォンゴール変種を話すから自分は

Tsongol だとみなす者が少なくないという特徴が指摘される。親族名称に関する先行研究のデータ及び調査データの比較から、ブリヤート語の変種の多様性が示される一方で、ロシア語の使用の頻度が低くないことも示される。また、ブリヤート語とロシア語のダイグロシア及びコードスイッチについて、考察される。ロシア語使用の領域が狭くない現実がありながらも、セレンガ・ブリヤート人は、両言語を包括する次元で「自分たちの」言語を捉えている処があり、ここに、彼ら彼女らが言語と民族の関係を考える上で孕まざるを得ないジレンマが存在している。

第6章「転換する環境に於ける経済と社会」では先ず、社会主義経済の特徴として屢々挙げられる集団主義概念について吟味され、旧社会主義圏の民営化を扱った文化人類学の先行研究が、文化概念に過度に依拠している点が批判される。その後、ノヨホンの「党大会」コルホーズ、ウブル＝ゾコイの「科学」コルホーズが民営化される過程が描き出される。その過程の特徴は、民営化の手法や方向性に関する朝令暮改とも言える変転、及び書類上の民営化というものである。しかし実質的には、コルホーズは破産寸前の状況にあり、村人の多くが失業している。コルホーズの機能不全は、それが単なる生産組織ではなく村落の生活を全面的に支える全的制度であったゆえ、村落全体に影響を及ぼしている。ここで見えて来るのは、自分の故郷(toonto)の境界が民営化によって脅かされ、ソ連時代ならばコルホーズとの相補的關係で維持されていた私的領域がコルホーズとの関係を切られてしまうゆえ、語りの上では、新コルホーズによる村落の統合、その「国家」への対峙關係が表象されるが、実際はその新コルホーズは殆ど「空集合」化している、という事態である。

第7章「oboo儀礼とその言説環境」では、東ブリヤート人の中に見られるoboo儀礼について詳述され、その儀礼の構成要素と儀礼にまつわる語りが分析される。主に石の塚で示されるobooは、嘗て氏族の領地の標識であり、ラマが読経する場であったが、ソヴィエト時代、その反宗教政策により、大々的に儀礼を行うことがなかった。また、チベット仏教寺院(dasan)及び祈祷堂(dugan)は、文字通り、破壊された。ソ連崩壊後、宗教施設が復興・再建され、oboo儀礼にしても多くの人々が参加する形で行われている。こうしたなか、oboo儀礼が仏教的か、シャーマニズム的かと定義しようとする言説上の特徴が見られる。oboo儀礼は、日常的に行われる様々な身体的所作から成り立っており、それゆえ、ソヴィエト時代にしても、部分的には継続して行われてきた。ポスト・ソヴィエト時代に変化したのは、儀礼それ自体というよりも、儀礼を取り巻く言説環境であると言える側面があるが、同時に見逃せないのは、何をもって宗教的とみなすかという判断基準が、宗教的要素を民族的要素と読み換えるソ連時代の言説的特徴に影響

されている点であり、定義という行為自体が、ブリヤート人という民族的集団範疇の画定に作用し、作用するゆえ儀礼を語りの対象とするという社会的メカニズムである。だが同時に、oboo儀礼には言説の対象にはなりにくい、という特徴が見られ(次章)、知識の社会的布置という問題が浮上する。

第 8 章「学校教育と民族的知識の社会的循環」は、前章での問いを引き継ぎながら、学校教育の現場とその外部、両者の関係を、民族的知識の社会的循環・布置と集団範疇との相関性を焦点にしつつ、記述・考察する箇所である。先ず新生ロシアで生じた教育の多元主義、及び民族教育の制度化が描かれる。次に、そうした条件下に於いて学校で行われる民族教育の様々な集団行事が概観される。授業の現場に関して本章で報告されるのは、郷土学習と歴史授業、及び慣習や伝統に関する授業の 3 点である。郷土学習は生徒に自分の故郷(toonto)を調べさせ、記録に残す、という点で、生徒を「ミニチュア民族誌家」にする活動であった。ここに見えるのは、民族的知識が、生徒の作文・パネル、新聞記事、専門書としての民族誌、教師が教材として用いる記事のスクラップなどを通じて、循環するという情報の社会的構図である。その循環は決してなだらかに進むのではない。寧ろ、循環するに連れ、学校でやりとりされる知識(とその定義)と、学校外で用いられる知識(とその定義)とのずれが生じている、と言った方が実在に即している。このことは、上記の 2 つの授業の現場とその外の日常的文脈との間で見て取れる。授業では、氏族レベルの集団範疇が言及されるのに対し、学校の外では、氏族レベルと父系出自分節(-tan)とが相互に置換可能な形で言及されたり、また、氏族レベルにしても使用する言語変種の基準でもって帰属氏族が言及されたりしてしまう事態があり、さらに、この事態をブリヤート語とロシア語との二言語使用(特にブリヤート語でいうiahan及びugとロシア語のrodの意味の一致とずれ)が一層複雑なものとするのである。

結語では、これまでの記述と解析を踏まえ、新自由主義に於ける社会概念の探求の営みと民族誌作成との間に親和性があることが指摘されて、本論文が閉じられる。